

社会人オンライン大学院修了生のアンケート分析： “修了で身につくコンピテンシー”の充足度の変化を中心に

高橋 暁子^{*1, *2}, 竹岡 篤永^{*1, *3}, 石田 百合子^{*1}, 鈴木 伸子^{*1}, 鈴木 克明^{*4}

熊本大学大学院教授システム学専攻同窓会^{*1}, 徳島大学^{*2}, 高知大学^{*3}, 熊本大学大学院教授システム学専攻^{*4}

Analysis of Questionnaire Survey to Alumni of Adult Graduate Students: Focused on Changes in Competencies Sufficiency

Akiko TAKAHASHI^{*1, *2}, Atsue TAKEOKA^{*1, *3}, Yuriko ISHIDA^{*1}, Nobuko SUZUKI^{*1} and Katsuaki SUZUKI^{*4}

Alumni association, Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University^{*1},

Tokushima University^{*2}, Kochi University^{*3}, Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University^{*4}

社会人オンライン大学院の博士前期（修士）課程の修了生を対象に，大学院での学びが修了後のキャリアに与えた影響，および，カリキュラム運営の改善につながる要素の把握を目的として Web による質問紙調査を行った。その結果，獲得したコンピテンシーを活かせる職務を遂行している場合においては，専門能力が維持・向上される一方，そうでない場合は最新動向を応用するといった能力から低下する可能性が示唆された。また，学んだ知識・スキル・態度が，具体的にどう実務で応用できているのかは今後の追跡調査が必要であることがわかった。

キーワード： オンライン大学院，e ラーニング，社会人，キャリア，修了生，質問紙調査

1. はじめに

近年，社会人等の学び直しへの取り組みが活発になってきている⁽¹⁾⁽²⁾。社会人の多様な職業訓練ニーズに応えるものとして，高等教育機関等が再就職や職業能力の向上に資する教育プログラムを提供している。この結果，より広い層において職業能力開発が行われるようになったが，一方で学び直しに期待する社会人のニーズと教育カリキュラムを提供する高等教育機関との間のズレも明確になってきた。例えば，社会人の学び直しの目的である「資格取得」に対応した教育カリキュラムがほとんど整備されていない，研究志向が強く仕事との接続性を感じにくい，経済的支援の整備不足などである⁽²⁾。

熊本大学大学院社会文化科学研究科教授システム学専攻（以下，本専攻）⁽²⁾は，前述した社会背景の中，2006年に開講した社会人を対象としたフルオンラインの大学院である。e ラーニングによって体系的に教授システム学を学ぶことができ，教育効果・効率・魅力の高いe ラーニングを開発・実施・評価のできる高度専門職業人としての実力を身につけることができる。2014年3月末時点で89名の博士前期（修士）課程修了生（以下，修了生は修士課程修了生を指す）を輩出しており，修了後，専門知識を各現場で役立てているとの声を聞く。

以上の背景から，本専攻での学びが修了後のキャリアに与えた影響と，本専攻のカリキュラムや運営の改善に

つながる要素の把握を目的とし，修了者を対象に，“修了で身につくコンピテンシー”の修了直後・修了数年後の自己評価を中心にしたアンケート調査を行った。本稿ではその結果について報告する。

2. 方法

本調査では，対象者を博士前期課程（修士課程）修了から約1年以上経過した修了生とした。2007年度（第1期）から2012年度末（第6期）までに修了した74名が対象となった。

調査期間は，2014年2月21日～3月25日（約1か月間）であった。ただし，この期間における回答者が少なかったため，2014年7月2日～7月23日（約3週間）に再度調査を実施した。本稿では，この両方の調査結果を示した。

調査方法は，Web 調査とした。修了生のほぼ全員が登録している同窓会のメーリングリストへ調査依頼メールを送り，Web 上に用意したアンケートフォームへ回答してもらった。調査依頼メールおよびアンケートフォームの冒頭で趣旨説明を十分行い，回答したくない質問は空欄も可能とするなど，倫理的配慮を行った。

質問内容は「コンピテンシー充足度」を中心に，「修了後に役に立ったと思う科目」「大学院での収穫」「今，学びたいこと」とした。

「コンピテンシー充足度」については以下のように調査を行った。本専攻では必修科目で身につく 12 のコアコンピテンシーと、選択科目で身につく 7 のオプションコンピテンシーが定められ、コンピテンシーに基づいてカリキュラムが編成されている。そこで全てのコンピテンシーについて、修了時とアンケート調査時点（修了後数年が経過）での達成度・充足度を比較し、修了後にも能力が維持・向上しているかを確認することにした。

「修了後に役に立ったと思う科目」については、各科目について「覚えているか」「役に立ったか」の観点から振り返ってもらうこととした。

「大学院での収穫」および「今、学びたいこと」では、調査時点で気のついたこと・考えたことを自由に書いてもらった。

以上を踏まえ、各科目で得たものと、科目以外での副次的な効果も併せて総合的に検討し、本専攻での学びが修了後のキャリアに与えた影響等を探ることとした。

3. 結果

3.1. 回答者属性

本調査の対象となる 2012 年度末までの修了生 74 名のうち、回答者は 32 名（回答率 43%）であった。同窓会メーリングリストに未登録の修了生も若干いることを鑑みれば、連絡可能な修了生のおよそ半数が回答したことになる。なお、回答者全員から、回答結果の研究利用への許諾を得られた。

回答者の入学年度（図 1）、修了から調査時点までの経過年数（図 2）は、おおむね偏りがなかった。本専攻に入学した時点と調査時の所属先は表 1 のとおりで、入学時と調査時に職種が変わった人は 9 名であった。

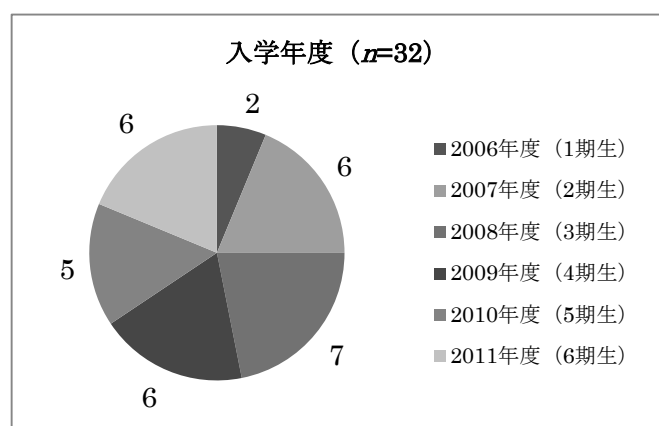


図 1 回答者の入学年度

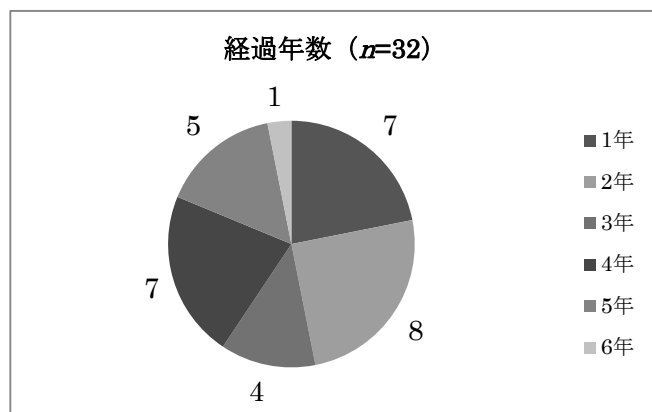


図 2 回答者の修了から調査時点までの経過年数

表 1 回答者の所属先 (n=32)

所属先	入学時点	調査時点
教育機関 (小・中・高・大学・専門学校)	12	13
一般企業	17	14
その他	3	5

3.2. コンピテンシー充足度

各コンピテンシーについて、修了時点とアンケート実施時点の充足度を、1（未達成）、2（最低限）、3（中程度）、4（高度）の 4 件法で自己評価をしてもらった。また、その変化の理由を自由記述で回答してもらった。なお、修了時点の充足度については、修了時にも“最終試験”として同じ尺度で自己評価しているため、当時のレポートを手元に用意してもらい、その得点を転記してもらった。

3.2.1. 全体平均

欠損値がある 4 名を除いた 28 名のデータを対象とし、修了時点とアンケート実施時点の平均値について t 検定（対応あり）を実施した（表 2）。

次の 2 つのコンピテンシーは、アンケート調査時点の自己評価が修了後よりも 5% 水準で有意に上昇したものである。「コア 7：実施したプロジェクトや開発したコースを評価し、改善のための知見をまとめることができる。」「オプション 6：コンサルティングの視点から、教育サービス・教育ビジネスのプロジェクト内容を提案でき、その実施をサポートできる。」

次の 2 つのコンピテンシーは、10% 水準で有意に下降したものである。「コア 5：Web ブラウザ上で実行可能なプログラミング言語による動的な教材のプロトタイプが

表2 コンピテンシー充足度 (n=28)

コンピテンシー		平均(SD)	
		修了時点	調査時点
コア1	教育・研修の現状を分析し、教授システム学の基礎的知見に照らし合わせて課題を抽出できる。	3.29 (0.65)	3.25 (0.87)
コア2	さまざまな分野・領域におけるさまざまな形のeラーニング成功事例や失敗事例を紹介・解説できる。	3.04 (0.78)	2.79 (1.01)
コア3	コース開発計画書を作成し、ステークホルダごとの着眼点に即した説得力ある提案を行うことができる。	2.89 (0.82)	2.79 (0.98)
コア4	LMSなどの機能を活かして効果・効率・魅力を兼ね備えた学習コンテンツが設計できる。	2.86 (0.83)	2.75 (1.09)
コア5	Webブラウザ上で実行可能なプログラミング言語による動的な教材のプロトタイプが開発できる。	2.57 (0.90)	2.36 (0.93)
コア6	開発チームのリーダーとして、コース開発プロジェクトを遂行できる。	2.89 (0.86)	2.89 (1.01)
コア7	実施したプロジェクトや開発したコースを評価し、改善のための知見をまとめることができる。	2.79 (0.77)	3.14 (0.83)
コア8	人事戦略やマーケットニーズに基づいて教育サービス・教育ビジネスの戦略を提案できる。	2.46 (0.78)	2.46 (0.98)
コア9	ネットワーク利用に関わる法律的・倫理的な問題を認識し、解決できる。	2.68 (0.80)	2.61 (0.77)
コア10	教授システム学の最新動向を把握し、専門家としての業務に応用できる。	2.93 (0.65)	2.57 (0.98)
コア11	実践から得られた成果を学会や業界団体等を通じて普及し、社会に貢献できる。	2.75 (0.95)	2.57 (1.18)
コア12	教授システム学専攻の同窓生として、専門性を生かして専攻の発展・向上に寄与できる。	2.61 (0.86)	2.79 (1.01)
オプション1	eラーニングサーバの導入、構築、管理、運営が行え、サーバサイドアプリケーションを用いた動的な教材のプロトタイプが開発できる。	2.11 (1.05)	1.86 (1.03)
オプション2	コンテンツの標準化や相互運用性の要件を満たしたeラーニングコース開発やシステム運用ができる。	2.00 (0.93)	1.86 (0.87)
オプション3	ネットワークセキュリティ上、安全なeラーニング環境を構築できる。	1.71 (0.84)	1.64 (0.85)
オプション4	知識・情報・学習の視点から経営課題について提言ができる。	2.36 (0.97)	2.39 (1.11)
オプション5	eラーニングの特定応用分野について、その領域独自の特徴を踏まえて内容の専門家と協議できる。	2.43 (0.90)	2.46 (0.98)
オプション6	コンサルティングの視点から、教育サービス・教育ビジネスのプロジェクト内容を提案でき、その実施をサポートできる。	1.50 (0.73)	1.82 (1.10)
オプション7	所属機関・顧客機関等のeラーニングポリシーの確立・改善・変革を提案できる。	1.75 (0.99)	1.89 (1.05)

(* $p<.05$, + $p<.10$)

開発できる。」「コア10：教授システム学の最新動向を把握し、専門家としての業務に応用できる。」

その他のコンピテンシーに関しては、有意差は認められなかった。

自由記述によると、コア7とオプション6でアンケート実施時点の方が向上している修了生のほとんどが、その理由として実務経験を挙げている(コア7で10名中9名、オプション6で7名全員)。一方、コア5でアンケート実施時点の方が低下している修了生のほとんどが、そ

の理由としてスキルを活かす機会がなかったことを挙げている(コア5で8名中7名)。また、コア10では、「教育関係の仕事から離れたため、遂行の機会がない。」など教育関連業務から離れてしまったという意見や、「業務が忙しく学会や研究会への参加が難しく、最新の動向を追うことができていないため。」など継続して最新動向を学ぶ機会がないことを理由とする意見が多かった。

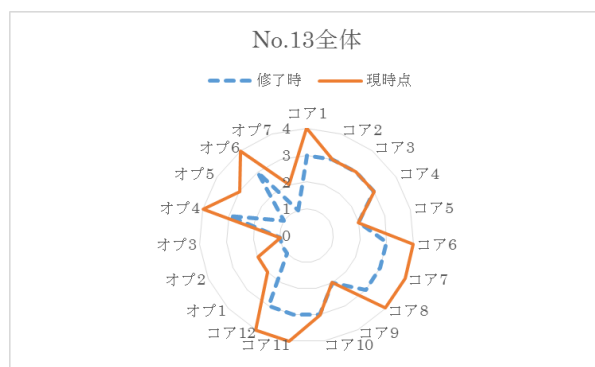
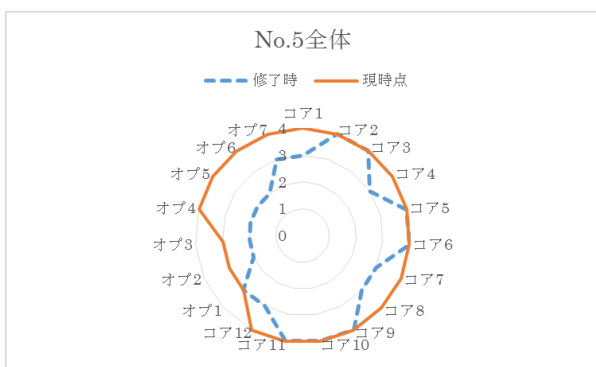
3.2.2. 個人別平均

全コンピテンシー項目充足度の平均点を個人別に見て

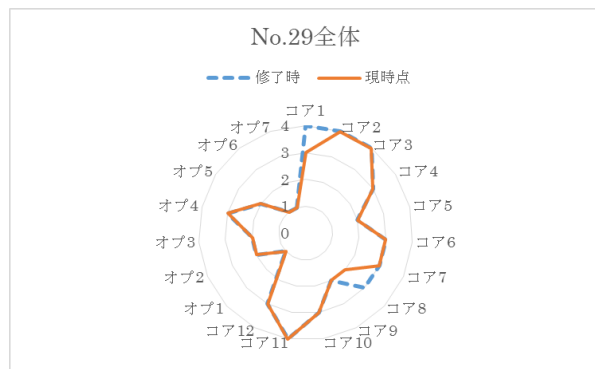
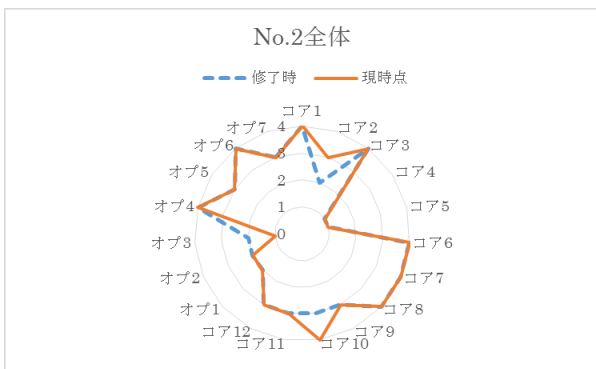
みると、修了時点より、アンケート調査時点のほうが5%水準以下で有意に高い修了生は4名、有意に低い修了生も4名であった。他の20名は修了時点と現時点の平均に

差はなかった。ただし、全項目についてほぼ変化がない場合と、多くの項目が増減したものの平均にすると差がない場合の2パターンが見られた（図3）。

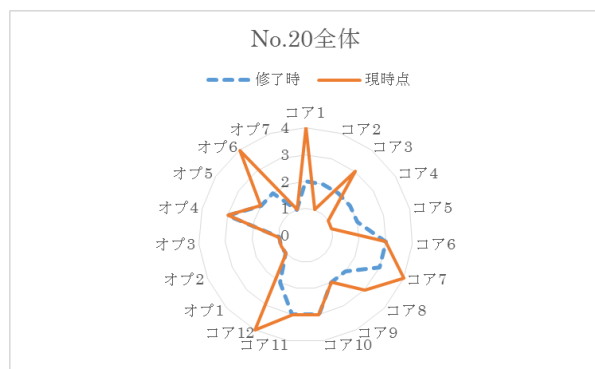
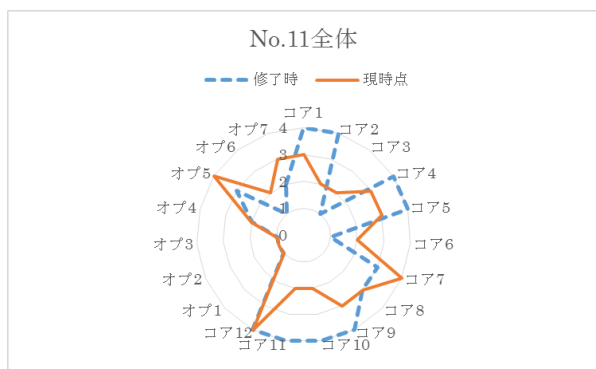
向上の例



維持（全項目ほぼ変化がない）例



維持（多くの項目が増減）例



低下の例

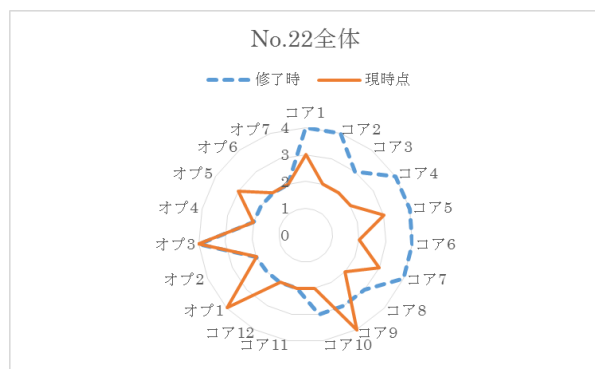
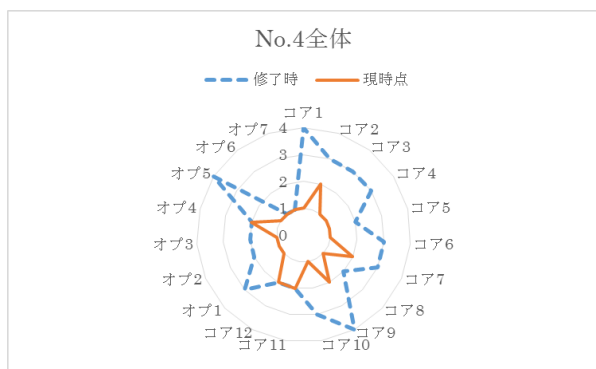


図3 個人別コンピテンシー充足度のグラフ（一部）

3.3. 科目の有用性

本専攻で開講している(していた)35科目について「現在でも内容を覚えているか」「修了後から現在まで役に立ったか」という設問を設け、3件法で尋ねた。「覚えているか」は、「1(全く覚えていない)～3(非常に覚えている)」、「役に立ったか」は、「1(ほとんど役に立っていない)～3(非常に役に立った)」で回答を得た。また、それぞれの回答の理由を自由記述で求めた。

本稿では必修11科目の結果を表3に示す。

「覚えているか」に関しては、平均が中央値である2以上となったのは必修11科目中10科目であった。上位3科目は「インストラクショナル・デザインⅠ(平均2.78)」「特別研究Ⅱ(平均2.75)」「インストラクショナル・デザインⅡ(平均2.59)」であった。一方、2以下となったのは1科目のみ「遠隔教育実践論(平均1.78)」であった。

「役に立ったか」に関しては、平均が2以上となったのは必修11科目中8科目であった。上位3科目は、「インストラクショナル・デザインⅠ(平均2.72)」「特別研究Ⅱ(平均2.66)」「eラーニング概論(平均2.56)」であった。

特にインストラクショナル・デザインⅠについては回答者全員が2以上をつけた。役に立った理由は2つに大別できた。1つは「ID(Instructional Design)の入り口、出口論のもとになったし、実践したことが大変良かった。」など、IDの基礎理論について教材開発などを通じて実践的に学ぶことができたという教育方法・内容を高評価する意見であった。もう1つは、「ここで得られた知見と教材の『教材設計マニュアル』は、現在でも私の基盤となっており、折々に振り返っています。」など、修了後も知識やスキルを維持・活用しているという意見であった。

次いで特別研究Ⅱが上位である点も注目したい。「(研究の)進め方を再確認した」のように、研究方法を学んだことが役立ったという意見がいくつかあった。しかし、具体的に実務にどう活かしているかまでは言及していないコメントも見られた。

一方、2以下となったのは「遠隔教育実践論(平均1.75)」「学習支援情報通信システム論(平均1.91)」「教育ビジネス経営論(平均1.97)」であった。

特に遠隔教育実践論については、「内容が思い出せない。(7件)」「得た知識を業務上で直接使う機会はなかった(4件)」という意見が目立った。また、「集中講義の資

料はあとから役だった」という意見もある一方で、「遠隔教育の方法も、MOOCなどでだいぶ変わってきていると思うので、現在使うためには、もっと学びたい部分でもある。」のように履修時点で学んだ内容と現時点で求めている内容とのズレも見られた。

なお、「覚えていない」「学習内容を使う機会がない」という回答は、「学習支援情報通信システム論」「教育ビジネス経営論」でも見られた。しかし、「LMSを活用しようと考えた時に役立った(学習支援情報通信システム論)」「色々な立場で検討することができたことが有用だった(教育ビジネス経営論)」など、肯定的な意見も多くあった。

3.4. 大学院での収穫

「現段階で振り返ってみて、本専攻での3つの収穫をお書きください。」という設問に対し、回答者32人が1人につき3つずつ記載した<収穫>を対象データとした。ただし、1人が収穫を2つしか記載していなかったため、対象データは合計で95文であった。

対象データ95文について、ラベルを付与し、グループ化した結果、8つのカテゴリに分類できた(表4)。そのうち「教授設計理論」「態度」「研究」「eラーニング」「学習スキル」「実践」の6つはさらに上位カテゴリとして「専門家としての知識・スキル・態度」にまとめた。

「専門家としての知識・スキル・態度」は、中でも教授設計理論に関するコメントが多かった。特に「IDを体系的に学べたこと」など、インストラクショナル・デザインをキーワードに挙げたコメントが多かった(17件)。ついで、態度や研究、eラーニングに関する収穫が挙げられた。中には、文書作成能力など、汎用的かつ基礎的な学習スキルを収穫したというコメントもあった一方、実務での応用力の収穫を示唆するコメントもあった。

「人とのつながり」は最も件数が多い収穫であった(30件)。同級生同士の横のつながりだけでなく、研究者など幅広い人脈ができたことが収穫として挙げられていた。

また、「学んだことを生かせる新しい職」「(結果的に)出世した」など、本専攻で得られた成果がキャリア転換に結びついたことを示すコメントもあった。

3.4. 今、学びたいこと

アンケート回答者32人中、27名が本設問に回答した。各人の記述を意味のある単位で分割したところ、46件のテキストデータが得られた。

表3 必修科目の「覚えているか」「役に立ったか」の平均（役に立ったが高い順）

分野 ^{注)}	科目名	覚えているか		役に立ったか	
		平均 (<i>SD</i>)	<i>n</i>	平均 (<i>SD</i>)	<i>n</i>
ID	インストラクショナル・デザインⅠ	2.78 (0.41)	32	2.72 (0.45)	32
総合	特別研究Ⅱ	2.75 (0.50)	32	2.66 (0.64)	32
ID	eラーニング概論	2.47 (0.50)	32	2.56 (0.56)	32
ID	インストラクショナル・デザインⅡ	2.59 (0.55)	32	2.44 (0.61)	32
総合	eラーニング実践演習Ⅰ	2.50 (0.61)	32	2.44 (0.66)	32
総合	特別研究Ⅰ	2.41 (0.70)	32	2.41 (0.65)	32
総合	eラーニング実践演習Ⅱ	2.56 (0.61)	32	2.31 (0.73)	32
IP	ネットワーク上の知的財産権及び私権	2.53 (0.66)	32	2.19 (0.68)	32
IM	教育ビジネス経営論	2.22 (0.65)	32	1.97 (0.81)	32
IT	学習支援情報通信システム論	2.03 (0.69)	31	1.91 (0.72)	32
IM	遠隔教育実践論	1.78 (0.70)	32	1.75 (0.61)	32

注) ID (Instructional Design), IT (Information Technology), IM (Instructional Management), IP (Intellectual Property)

表4 3つの収穫（自由記述）

カテゴリ	キーワード		文例	件数
専門家としての知識・スキル・態度	教授設計理論	ID, 教育工学, 教育学 など	ID を体系的に学べたこと	29
	態度	自信, 興味, 関心, 視野 など	専門家としての自信を身につけられたこと	10
	研究	研究, 研究方法, 論文 など	研究の方法, 評価などが身についた	7
	e ラーニング	e ラーニング	e ラーニングの可能性が分かった.	7
	学習スキル	文書作成能力, 自己マネジメント力 など	必修科目の付属的な科目(単位にならない)で, レポートの記述内容を詳細に点検していただき, まるでなかった文章作成能力が飛躍的に向上した.	4
	実践	設計, 実践知 など	自分で設計した研修を提供できるようになった	4
人とのつながり	人脈, 仲間, 同窓生, 先生, 研究者 など		全国に同じ志を持つ仲間ができた	30
キャリア	専門家, 新しい職, 出世, 学位		学んだことを生かせる新しい職	4
合計				95

この 46 件を対象データとして、それぞれ 1～2 のキーワードを抽出し、既存科目の分類を参考にしながら、本専攻のコンセプトである「4つの I (ID, IT, IM, IP)」^③に分類した (表 5)。

言及のもっと多かった分野は ID で 24 件あった。内訳は、教育心理学や学習理論を学びたいという意見 (9 件)、人材開発 (6 件)、教育評価 (3 件)、学習環境デザイン (3 件)、ID (2 件) であった。次いで言及の多かった分野は IM (Instructional Management) で 8 件。マーケティング (3 件)、コンサルティング (2 件)、組織開発 (2 件)、ナレッジマネジメント (1 件) であった。一方、IP (Intellectual Property) は 1 件、IT (Information Technology) は 0 件であった。

4. 考察

4.1. コンピテンシー充足度

コンピテンシー充足度の修了時点と修了数年後の変化の理由についての自由記述から、調査時点の向上は実務経験によることが示唆された。逆に調査時点の低下は能力を活かす機会がなかったためであることが示唆された。

修了後の実務経験による修得知識・スキル活用の機会の有無がコンピテンシー充足度の変化に影響を与えるとという仮説に基づき、コア 7 およびオプション 6 の向上を捉えると、修了生はコンサルティングやマネジメントといった上流工程の実務を任されることが多く (オプション 7)、プロジェクトやコースの評価を行い、改善のための知見をまとめる (コア 6) 専門家として活躍している姿が浮かび上がってくる。

表 5 今、学びたいこと

分野 ^④	主なキーワード	件数
ID	教育心理学, 学習理論, 人材開発, 教育評価, 学習環境デザイン, ID など	24
IM	マーケティング, コンサルティング, 組織開発, ナレッジマネジメント	8
IP	知的財産権	1
統合	教材開発, ICT 導入	4
その他	トレンド, ベンチャー, 国際協力, 高等教育, 医療系, 博士後期課程など	9

注) ID (Instructional Design), IM (Instructional Management), IP (Intellectual Property)

その一方で、コア 5 およびコア 10 の低下傾向を考察すると、実務機会に恵まれない場合は低下する可能性があり、実務とは別に情報収集を行う機会を設けるなどの必要があるのかもしれない。

今後、インタビュー調査などでより詳細なデータを集め、これらの仮説を検証する必要がある。

4.2. 科目の有用性

必修科目の多くについて、修了生は現在でもおおむね内容を覚えており、獲得した知識やスキルは実務において役に立ったと考えていることが示唆された。

また、ID および総合分野の科目が上位になったことは、実践現場でのニーズと本専攻のカリキュラムとが合致していることを示唆していると言えよう。

しかしながら、IT および IM 分野の科目がそれほど役に立っていないと認識されていることも分かった。これらの領域は展開が速く、学んだことをそのまま活かすことが難しい場合もあるのだろう。科目内容を常にアップデートすることが、実践現場から生まれるニーズと学習内容のズレを埋めていくために必要だと考えられる。実際に、2014 年度の「遠隔教育実践論」には MOOC の内容が追加されるなど、改訂が試みられている。

ただし、科目内容と現場ニーズとの食い違いについては、科目内容と現場のニーズは合っているものの、配置転換などによって「修了生がそもそも学んだことを活かせる現場にいない」という可能性も大いにあるだろう。今後、修了生を取り巻く現状を調査する必要がある。

4.3. 大学院での収穫

修了生は主として「専門家としての知識・スキル・態度」と「人とのつながり」の 2 つを収穫として認識していることがわかった。前者は本専攻の教育目標そのものを反映した結果である。この結果からも、本専攻で提供するカリキュラム内容と実務現場のニーズとの接続の良さがうかがえる。一方、後者は社会人学生に共通して見られる傾向である^④^⑤。本専攻ではさらに、e ラーニングを通じた異業種人材との深い交流が示唆された。

また、入学時点とアンケート調査時点で職種が異なる人がいることと、この 2 つの収穫を考え合わせてみると、本専攻での学びが実務や自身のキャリアアップ (またはキャリアチェンジ) へつながっている可能性があるのではないかと、これも、今後の調査で確認していきたい。

さらに、役に立った科目として特別研究 II が上位に位

置づけられたことと、3つの収穫の1つに「研究」を挙げる意見が少なくない（7件）ことから、研究する力、または研究成果そのものが実務に役立った可能性がある。大学院は研究志向が強く仕事との接続性を感じにくいという先行調査^②もあるが、実務能力の育成にとどまらず、“実務に役立つ研究をする”ことこそが、社会人大学院の意義ではないか。修了生の修了後の実務内容と学んだ研究内容・方法との関連性を明らかにすることも、今後の検討課題である。

4.4. 今、学びたいこと

既存科目に含まれない新しいキーワード（表5中ではトレンド、ベンチャーなどとして記載）が挙げられたことから、最新情報を得続けたいというニーズがうかがえた。これはコンピテンシー充足度の項で述べた「実務とは別に情報収集を行う機会を設けるなどの必要がある」を補強する意見と言えるだろう。既存科目に含まれるキーワードに言及するものからは、現在の仕事を通じて博士前期課程で学んだことをより深める必要性を感じることがうかがえる。具体的な学習内容については個々の業務内容などによって異なると思われるが、学んだ事柄を修了後に自らアップデートしていく力の養成が求められているのかもしれない。同窓会がゆるやかな実践コミュニティとして機能することが望ましいのではないか。

4.5. 大学院での学びが修了後のキャリアに与えた影響

以上の考察を踏まえると、次のことが示唆された。

- （1）修了時に獲得したコンピテンシーを活かせる業務に携わることで、専門家としての能力が維持・向上される。一方で、実務経験に恵まれない場合は最新動向を応用するといった能力から低下するため、別途機会を設けて学習を続ける必要がある。
- （2）修了後の実務において、特にID分野が役立った可能性がある。一方で、展開が早いと考えられるIT、IM分野では実務への応用が難しい場合がある。
- （3）社会人大学院では「専門家としての知識・スキル・態度」だけでなく、「人とのつながり」も得られる。
- （4）研究する力、または修士論文の研究成果そのものが修了後の実務に役立った可能性がある。

まず（2）について、本専攻で学んだ知識・スキル・態度が、具体的にどう実務に応用できているのかを検証することが課題である。社会人学生には本専攻入学時までに培った能力がある。本専攻で学んだこととそれまで

に学んだことがどのように関係するのかは、詳細なインタビュー調査などによって明らかにする必要があるだろう。その上で（1）について、実務を通じて本専攻で獲得した能力をどのように向上・発展させているのか、その成長プロセスを明らかにしていきたい。その際には、経験学習サイクル^⑥などの既存の成人学習理論が参照できるだろう。修了生の修了後の能力向上事例などが集まれば、ロールモデルとして活用するなど、同窓生が本専攻の価値をさらに高めることに寄与できると思われる。

その他のさまざまな仮説も含め、今後インタビュー調査などを行い、詳細に検証していく必要がある。

5. おわりに

本稿では、大学院での学びが修了後のキャリアに与えた影響を把握し、カリキュラムや運営の改善につなげる基礎資料とする目的で行った修了生調査について報告した。修了時に獲得したコンピテンシーを活かせる職務を遂行している場合には専門能力が維持・向上する一方、そうでない場合は低下する可能性が示唆された。大学院での学びが修了後のキャリアに与えた影響を明らかにするためには、今後インタビュー調査などが必要である。

謝辞

本調査にご協力いただきました教授システム学専攻同窓会員のみなさまに深謝いたします。

参考文献

- （1）文部科学省 社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/shakaijin.htm, 2014年12月1日閲覧
- （2）早稲田大学: “社会人の大学院教育の実態把握に関する調査研究報告書”, 文部科学省平成21年度先導的・大学改革推進委託事業, (2010)
- （3）教授システム学専攻 Web サイト, <http://www.gsis.kumamoto-u.ac.jp/>, 2014年11月29日閲覧
- （4）関和子, 富永敦子, 向後千春: “オンライン大学を卒業した社会人学生の回顧と展望に関する調査”, 日本教育工学会論文誌 38(2), 101-112, (2014)
- （5）日経キャリア: “社会人大学院生リアル白書”, 2006年2月号, (2006)
- （6）松尾睦: “経験からの学習-プロフェッショナルへの成長プロセス-”, 同文館出版, (2006)